

# ドラゴンボールIF

通りすがりの筋肉

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もしもバーダック達がいきていたら？

な、話です

# 目次

はじまり	1
伝説の超サイヤ人	20
守護者サイヤ人？	49
外伝 出逢い	65
ベジータ紛争	86
親子の絆	94
第二次ベジータ紛争	111
サイヤ人魂	123
決着	133
疑問	146
家族の温もり	154



# はじまり

宇宙のどこかに、惑星ベジータと言う星があつた

そこには、宇宙一の強戦士族、サイヤ人がいた

彼等は宇宙の帝王、フリーザの命令で宇宙のあらゆる惑星を滅ぼし、異星人に高く売る地上げ屋として働いていた

今日もまた…

『オラあ!!?』

ドカーンッ!!?

特徴的な髪型をした、左頬に大きな傷のついた男が気功波で異星人の軍団を焼き払つた

彼の名はバーダック

サイヤ人の下級戦士である

彼は他の星に攻め入る度にボロボロになって還つて

来るため、今では戦闘力が1万を超えていた

彼等サイヤ人は、死の淵から蘇る度に戦闘力が上がる習性がある

サイヤ人の下級戦士は、基本的には高くても戦闘力が3000程なので、1万を超えている彼はエリート戦士にも匹敵し、その勇猛さはサイヤ人の間でも有名であった

『てめえバーダック、人の獲物を横取りすんじゃないやねえよ!』

『ふんっ、てめえがトロトロしてっからだよ、トーマ』

『な、なんだとおっ!?』

バーダックのチームメイトの男が、いかにも悔しそうにバーダックにつつかかって来た

彼の名はトーマ

バーダックの戦友であり、最大の友である

顔は少し長い、短髪の男前である

『はいはい、こんな時にケンカしてんじゃないよ』

『でもよくセリパ…』

『でもじゃない!』

『ふんっ』

短髪の女が、二人をなだめた

彼女はセリパ

トーマと同じくバーダックの戦友であり、バーダックチームの紅一点

そしてサイヤ人の数少ない女性である

少し冷たそうな切れ目をした美人である

『早くしな、トテツポとパンブーキンがしんどそうにしてたよ！』

『ちっ、しゃあねえな。 トーマ、ぐずぐずしてんな、行くぞ』

そう言うトバードックは、凄く速さで飛んで行った

『な、てめえ!?』

そうしてトーマとセリパは、バードックの後を追って飛んで行った

彼等の飛んで行った方は、大小色々な爆発が起こっていた

バードックやトーマのチームメイト、トテツポとパンブーキンが戦っているのだ

『ちっ、うじゃうじゃ出て来やがって！ トテツポ、大丈夫か!?』

『… おう』

二人の巨漢が、並み居る異星人を相手に戦っている

一人はバードックチーム一の巨漢、トテツポ

無口で、いつも何か食べてる変わり者

額には大きな三つの傷があり、頭はハゲている

もう一人の髭をはやした男がパンブーキン

少し肥えた体型だが、見た目に合わず素早い動きで、敵を倒している

『ち、何やってんだてめえら』

『おう、バーダック！ 来てくれたか!??』

『もうすぐトーマ達も来る。 さっさと片付けるぞ』

『おうつ!!?』

『… わかった』

バーダックが加勢し、形勢は逆転した

少し遅れてトーマとセリパも加わり、勢いにのった彼等はすぐに敵を全滅させた

『よし、ここは片付いた。 後は一気にカナッサ星人を絶滅させる!!?』

バーダックの声に全員領き、残る異星人に攻撃を仕掛けた

そして、この星は滅びて行った…

『けっ、ちくしょう…』

パンブーキンが、頬に出来た傷を訝しげに触っている

先程の戦闘で負傷したらしい

『はっ、てめえが油断してっからだよ。 しかしバーダック、息子の誕生祝にいちやあ、

少しやり過ぎたなあ』

『息子の誕生祝だと? けっ、くだらねえ冗談だ』



今日、バーダックには二人目の息子が産まれたのだ

長男になった息子のラディッツは、まだ5歳だが、もう戦士として惑星ベジータの子、ベジータと共に他の惑星に攻め込んでいた

『この星も片付いた事だし、惑星ベジータに還って会って来たらどうなんだい?』

『へっ、何の見所もねえ最下級兵士のクソガキに、ワザワザ会いに行くバカがいるか。

どうにでもしろと言つとけよ』

バーダックが冷たく言い切る

彼等サイヤ人は親子の愛情が希薄な種族なのだ

それでもセリパがこう言った発言をしたのは、やはり女性だからだろう

『アンタ、そんなこと言うともまたギネに怒られるよ?』

『…うるせえ』

『『『ハハハハハ』』』

ギネとは、ラディッツと今日産まれた息子の母親であり、バーダックの嫁（サイヤ人に夫婦の概念があるかは不明だが）である

彼女の紹介は、また後でしょう

とにかく、バーダックはどうもギネには頭が上がらないのだ

『しかし、十日以内に全サイヤ人に帰還命令を出すなんて、どうしたんだろうな?』

『さあ？ アタシにはフリーザの考えはわかんないね』

『セリパ、スカウターを切れ、盗聴されるぞ』

『あ、すまないね』

『だが、確かに怪しいな。』

今、全サイヤ人に十日以内に惑星ベジータに帰還するようフリーザから命令が出ている

元々サイヤ人の殆どは、フリーザを快く思っていない

それでもフリーザに付き従うのは、その強さと、戦いの場をくれるからに他ならない  
『嫌な予感がするぜ…』

バーダックは、一人呟いた

『フリーザ様、全サイヤ人に帰還命令、出し終わりました』

『ご苦労様です、ザーボンさん』

『… 本当にサイヤ人を、この宇宙から消すのですか？』

『はい、伝説の超サイヤ人などが現れたら、不愉快ですからねえ』

『何だか勿体無い気はするが、まあいいだろ』

『しかしドドリア、奴らもただでは消されないだろう。一応、用心はしておけよ』  
『何だお前、ビビってんのか？』

『いや、私はただ、奴らサイヤ人は個々では大したことないが、徒党を組むと厄介だから用心した方がいいと思ってるな』

『なに、たかが猿もどき、団結したところで私の敵ではありませんよ…』

『はっ…』

『… フフフ』

『ギネ、今選ったぞ』

『バーダック！ おかえり！』

『ああ』

バーダックは惑星ベジータに帰還後、真つ先に病院に向かった

そこで、一人の女性がバーダックを迎えた

彼女がギネ

バーダックの嫁である

少し長めの髪に、優しそうな綺麗な瞳をした女性だ

彼女はサイヤ人の中では変わり種で、戦闘はあまり好きではなく、今はもっぱら食堂で料理人として働いている

今は産休（サイヤ人にあるのかそんなの？）を取り、病院にいたのだ

そして、今日、念願の次男が産まれたのだ

その子は今、保育器に入っているらしい

『赤ちゃん、見た？』

『…：… どれがそうだかわかんねえよ』

『大丈夫！ バーダックにそっくりだから、すぐにわかるよ！ ねえ、見て来なよ！』

『…：… ちっ、わあったよ』

『やったあw』

『ふんっ…』

バーダックは、渋々と言った感じで、息子を見に行つた

そこで、一人の赤子が目に入った

『…：… カカロット、か。こいつか、俺のガキは』

確かに、バーダックとによく似ていた

元々サイヤ人は、顔のタイプが少ないため、よく似た顔の者がいるのは大して珍しくないのだが

『……』ピピッ

バーダックは、ただ無言でカカロットの戦闘力を、スカウターで計測した  
『ちっ、戦闘力たったの2か』

明らかにガツカリしたと言った態度を取った

産まれた時点で戦闘力を図り、その戦闘力でクラスが決まるのがサイヤ人だ  
戦闘力が2と言うことは、カカロットはバーダックと同じ最下級戦士である

『まあ、俺のガキだしなあ。 ん?』

バーダックはふと、カカロットの隣の保育器に入った赤子に目が行った

『……ブロリー、か。 こいつか、パラガスのガキは。 戦闘力は……1万!?』  
な、産まれたばかりでもうそんなに高い戦闘力があるのか!?!?』

馬鹿

バーダックは驚愕した

惑星ベジータの王、ベジータ王ですら、戦闘力は1万と数千

この赤子は、産まれたばかりで自分に近い戦闘力を持っている  
成長すれば間違いなくベジータ王を超えるだろう

『……こいつは、何か危険な臭いがするな』

この時、バーダックは予感した

この赤子が将来、とても危険な存在になる事を

『あ、バーダック、どうだった?』

バーダックは、ギネのいる部屋に戻って来た

『ああ、見てきたよ』

『で、感想は?』

『感想? 何だそりゃ?』

『もう、可愛いとか、色々あるでしょ?!?』

『... そうだな』

『もう、ホント素っ気ないわねえ! ラディッツの時もそうだったし!』

『うるせえ』

バーダックの頭は、あのプロリーという赤子の事で一杯だった

だが、ギネには語らなかつた

『ああ、早くラディッツ選って来ないかなあ。早くカカロットを見せてあげたいなあ

W』

『.....』

く十日後く

『ラディッツ、結局還つて来なかつたね…』

『何でも攻め入った星をおとすのに時間が掛かっただらう。まあ、今日中には着くだらうよ』

『そつかあ…』

ラディッツの還りが遅くなり、ギネはここ最近落ち着かなかつた

ラディッツは無事なのか？

怪我してないか？

元気に帰つて来てくれるのか？

そして…

『カカロット、大丈夫かな？　ちゃんと地球つて星に辿り着けるかな？』

『… さあな』

戦闘力の低いカカロットの様な下級戦士は、赤子の時に飛ばし子として他の惑星に飛ばされ、成長してからその星を侵略するのだ

産まれて間もなくこの腕にも少しの間しか抱くことが出来なかつた我が子を想い、ギネは少々鬱になっていた

その時、

ドカツ!!?

誰かが、家のドアを勢い良く開けた

二人は一瞬、ラディッツかと思つた

しかし、そこにいたのは慌てた表情をしたトーマであつた

『バ、バーダック!!?』

『どしたあ、トーマ?』

『トーマさん、いらつしやい。何かあつたの?』

『た、大変だ! ベジータ王がフリーザに殺された!』

『な、何!!?』

『ええ!!? な、何で!!?』

『フリーザの野郎は、俺達サイヤ人を惑星ベジータごと消すのが目的で帰還命令を出したんだ! それに気付いたベジータ王が、数十人のサイヤ人とフリーザに攻撃を仕掛け  
たらしいんだが、フリーザに...』

『そ、そんな... バーダック、私...』

『.....』



『今、フリーザの部下が俺達に攻撃を仕掛けて来てる。お前も来てくれ!』

『… ああ』

『バーダック!』

『… ギネ、おめえはここにいろ』

『そんなつ! 私も戦う!』

『ダメだ、おめえは足手まといだ。行くぞ、トーマ』

そう言ってバーダックは、飛び出して行った

残されたギネは、ただ悲しそうな顔をしていた

『… ギネ、あいつ、ああは言ったが、ホントはお前を…』

『… わかっている。私が辛いのは、こんな時に、何も出来ないのが、辛いし、悔しい

の…』

『ギネ…』

『トーマさん、バーダックをお願いします』

『… ああ、任せときな!』

そして、トーマもバーダックを追って飛び立った

ギネはただ、その背中を見送る事しか出来なかった

『バーダック、無事に帰って来て…』

戦場では、多くの仲間が死んでいた

敵の数は、こちらとは比べ物にならない

一人、また一人と、見知った顔が生氣を失い、血で赤く染まって行く

『バーダック、ここももう保たないよ!』

『危ねえ、セリパ!』

『えっ?』

『死ねえ!!?』

『くっ...』

一人のフリーザ兵が、セリパに襲いかかった

避けられない事を悟ったセリパは、硬く瞳を閉じた

が、

『おらあ!』

『ぐはあ!!?』

間一髪、トーマがフリーザ兵の前に現れ、腹に渾身の膝を入れた

『油断してんじやねえ!』

『ああ、トーマ、ありがとう』

『へっ／＼／＼』

しかし、状況は変わらない

バーダックのチームは、何とか死人は出ていないが、誰かがやられるのも時間の問題だ

『… てめえら、ここを頼む』

『な、バーダック、何する気だ!?!?』

『… また、後でな』

『バーダック!!?!?』

バーダックは一人、空に向かって飛び出して行った  
トーマ達は交戦中なので、追うことが出来なかった

『あいつ、まさかフリーザに!?!?』

『そ、そんな!?!? 殺されるよ!?!?』

『おいトーマ、何とかならねえのか!?!?』

『… くっ』

『ちっ、野郎、スカウターを持って行ってねえ。』

連絡がとれねえ!』

『そんな!!?!? じゃあバーダックは!?!?』

『今は信じるしかねえだろ!!?!?』

『バーダック…!』

『死ぬなよ、バーダック……』

バーダックは一人、塔の上からフリーザの宇宙船を見ていた頭の中には、死んでいった仲間の顔、怒り

そして、ギネ、ラディッツ、カカロットの顔が浮かんでいた

『俺が…… この、俺が……』

バーダックは両の拳を握りしめ、瞳に決意を浮かべた

『未来を、変えてみせる!!?』

バーダックは、飛び立つ姿勢を整え、勢い良く空に向かって飛んだ宇宙船に近付くと、数百人の兵士が行く手を阻むんだ

バーダックは一人拳を振るい、撃ち、かわし、次々に兵士をなぎ払っただが、バーダックもボロボロだった

いったい何度蹴られ、殴られ、撃たれただろう

だが、バーダックは止まらなかった

ただ、未来を変えるために

無事に帰って、一人泣いているであろう妻の頭を撫でてやるために

『フ、フリーザアアアア!!?!!?!!?!!?』

バーダックは己を奮い立たせるために吼えた

身体に喝を入れるために

途切れそうになる意識を保つために

『フリーザアアア、出て来やがれええええええええええ!!?!?!?!?!?!』

そして、宇宙船に辿り着いた

何人もの兵士に捕まれ、ろくに身動きも取れないまま、兵士ごと引きずるようにして

辿り着いたのだ

『俺は貴様が許せねえええええええ!!?!?!?!?!?!』

そして、フリーザが姿を現した

余裕を見せてはいるが、微かに表情に怒りが浮かんでいるのがわかる

周りにいた兵士達は怯え、顔を青くしている

バーダックだけは、不適な笑みを浮かべていた

『へへっ、これで、全てが変わる…』

この惑星ベジータの運命…

この、俺の運命…

そして、貴様の運命も!!?!』

バーダックの右手に、全エネルギーを使った渾身の気功弾が現れた

対するフリーザは、指先に豆粒程の大きさの球体を作った





## 伝説の超サイヤ人

『くつ、くそ、フリーザ!!?』

フリーザの一撃に飲み込まれたはずのバーダックが、目を覚ました  
まだ、自分に何が起きたのか、理解が出来ない

『うぐ、くつ、た、確か俺は、惑星ベジータの爆発に巻き込まれて:~:

ここは、どこだ?』

見ればバーダックは、布団に寝かされ、戦闘服は脱がされていた  
誰かが寝かせてくれたのだろう

バーダックは窓から、外を見渡した

『この、景色や空の色、どっか惑星ベジータに似ているが:~:』

恐らくは初めて来た星なのだろうが、何故か初めてではない気がした  
その星は、どこか故郷の星に似ていたからだ

そう思っていると、バーダックは後ろから声を掛けられた



『おお、目が覚めたみたいですね』

『んっ!?』

振り向くとそこには、二人の異星人が立っていた

どうやら、親子らしい

『何だこいつら?』

見たこともない種族だ...』

その種族は、どこか漫画チックに描いたカエルの様な姿をしていた

だが、敵意はないようである

『ふふっ、そう警戒しなくても大丈夫

私はイパナ、この村で、医者をしている者です

そしてこの子は、息子のベリーです

森の外れで倒れていたあなたを、見つけて来たんですよ』

異星人が自己紹介してくる

バーダックからすれば興味もなければ、自己紹介し返すつもりもないが、何となく、

黙って聞いていた

『これは、この惑星プラントに伝わる、秘伝の薬です』

『惑星プラント?』

「確か惑星ベジータの元の名前だ…。」

『これで、あなたの傷も良くなりますよ』

そう言うといパナは、バーダックの傷に薬を掛けた

すると、すぐに薬は効いてきた

『(傷の痛みが引いていく、メデイカルマシンの液体にそっくりだ…。)]

星の名前、この秘伝の薬、バーダックの頭には、一つの推測がうかんだ

『いったいどういうことだ？』

俺は過去の時代に来ちまったのか？』

そんな事が頭に浮かんだ

フリーザの一撃に飲み込まれてからの記憶もなく、バーダックには、疑問だらけだっ

た

『おじちゃん、お名前は？』

考え事をしてしていると、不意にベリーに話しかけられた

『…ガキは嫌いだ』

『うっ…』

バーダックは冷たく言った

ベリーは少し残念そうにした

そんな事を言っていると、またギネに怒られるだろうな  
なんて考えてると、いきなり轟音が聞こえた

窓の外を見ると、見覚えのある宇宙船が飛んでいた

『あ、あれは、まさか!?』

そう、フリーザの宇宙船にそっくりだった

宇宙船は、少ししたところに着陸した

『あつちは、村の方向だ!』

『おっ?』

イパナが言うと、ベリーは何事かと、窓の外を見ようと、背伸びしている

『(…行ってみるか)』

バーダックは独り、宇宙船が着陸した場所に向かって飛び出した

『あ、キミ!?』

イパナに止められたが、構いはしなかった

もしかすれば、憎き怨敵の宇宙船かもしれないと思うといても立ってもいられなかつ

た

すると、村からいくつかの爆発が起こった

よく見ると、二人の異星人が、村人達は達を襲っていた

『ちっ、フリーザじゃねえのか…!』

どうやら、フリーザではないようだ

別に村人達の事はどうでもよかったが、肩慣らしついでに異星人の相手でもしようかと思つて近づいた

『よく聞け!』

今日からこの惑星プラントは、宇宙海賊チルド様の物になる!

逆らう奴は皆殺しだ!!?

カーカカカツ!!?』

汚い笑い声だと、バーダックは思った

『おい、お前ら』

『ん? 何だ俺達に刃向かう気か?』

『馬鹿な奴だ!』

キャビラ、見せしめにしてやれ!!?』

『おう、任せろ!』

異星人の一人がバーダックにサイコガンを発射したが、バーダックは高速移動でかわし、勢いをつけてホディブローを入れた

『あぁ!』

『……』

バーダックが敵の顎を掴み、無言で睨みを利かせていると、もう一人の異星人がサイコガン撃とうとした

だが、バーダックはまた高速で敵に近づき、撃つ前に蹴りを入れ、後方の岩山まで吹き飛ばした

その間に、先程の異星人も倒れていた

『ちっ、これじゃありハビリにもなりやしねえ……』

バーダックは、敵のあまりのあっけなさに落胆していると、村人達に囲まれ、例を言われた

『ありがとう、あんたは村の救世主だ！』

などと言われたが

『勘違いすんな、てめえらが死のうが生きようが、俺には関係ねえ』

そう言い残し、その場を去って行った

村人達は、ただ無言でバーダックの飛んで行った方を眺めていた

バーダックは、村から少し離れた所に洞窟を見つけた

『当面の住処はここにするか……』

何もなかったの洞窟だったが、雨風さえしのげれば、特に文句はなかった

バーダックは腰を下ろし、自分に起こった事を考え始めた  
『まったく、どうなってるんだ…』

あの爆発に巻き込まれてからの事がどうしても思い出せねえ…  
くそお、俺はいつたい、どうしちまったんだ…！』

バーダックが、必死にあの時の事を思い出そうとしていると、洞窟の入り口から気配を感じた

『んっ？ 誰だ！』

するとそこには、何やら荷物を抱えたベリーが立っていた

『あの、これ、おじちゃんに…』

食べ物と、お菓を…』

ベリーは、行き倒れていたバーダックが心配なのか、バーダックに色々差し入れを持って来てくれたが、

『いらねえよそんなもん…』

いいから、さっさと消えやがれ』

などと冷たくあしらうが、ベリーも退こうとはしなかった

『さっさと行かねえと、ぶっ殺すぞ！』

バーダックが、冗談半分に言うのと、ベリーは涙を浮かべて去って行った

『食べ物、ここに置いておくから…』

そう言い残して

バーダックは、いらねえとは言ったものの、やはりサイヤ人は空腹には勝てず、すぐに食べ物を平らげた

『（…うめえじゃねえか）』

はたして美味いと感じたのは、味のせいだけなのか…

『（そう言やあ、ギネの作る飯も、他の奴のより美味かったなあ…）』

愛情は最高のスパイスと云う言葉がある

もちろん、バーダックがそんな言葉を知っているはずもないが

『ギネ、ラディッツ…』

カカロット…』

ここにいない、家族を想い、バーダックは初めて不安な気持ちになる

『俺は、帰れるのか…？』

もし帰れなかったら、俺は…』

そして、少しの弱気を感じた

これも、初めての事だった

『…運動でもするか』

不安や弱気を吹き飛ばすために、リハビリも兼ねて身体を鍛え始めた翌日、外は雨だった

とくにやる事もなかったバーダックは、この日もトレーニングをしていたすると、またベリーが食べ物を持って来た

別に用もないので、バーダックは気付かないフリをした

ベリーは、嬉しそうに食べ物を置いて無言で去って行った

まあ、また来るだろうと思つたバーダックは、分かりやすい所に空になった籠を置いていた訳だが

『…変なガキだ』

そう言つて、トレーニングを続けた

『ほんとにまた来るとはなあ…』

予想していたとはいえ、いざ本当に来ると感心すらしてしまう

何があの子をそうさせるのか？

自分の何がそんなにあの子を惹きつけるのか？

バーダックには分からなかったが、決して嫌な気にはならなかった

むしろ何か、胸の中が暖かくなるのを感じた

『…明日も来るんだろうな』



何故か、そんな事を考えていた

翌日、またベリーは来た

バーダックは、今日は自分から食べ物をもらいに行つた

ベリーは最初は驚いたが、すぐに嬉しそうにバーダックの隣に腰掛けた

ベリーはただバーダックを見ていると、バーダックはパンをベリーに差し出した

そして、自分の名前を教えた

『… バーダック』

『えっ?』

『俺の名前だ』

ベリーは、とても嬉しそうにバーダックの名を呼びながらパンを食べた

食事が終わり、少し雑談をした

『バーダックさんはどこから来たの?』

『… さあな』

『えっ?』

わからないの?

ひよつとして、迷子なの?』

『… まあ、そんな感じだ』

『そっかあ…』

バーダックさん、家族は？』

『… 嫁と、ガキが二人いた』

『へえ』

ねえ、どんな人達なの？』

『… 嫁は、まあ、甘ったるい奴だ

いつもコロコロ表情変えて、忙しい奴だ

ガキは、上がもう五歳になる

生口叩きやがるが、まだまだガキだ

もう一人は、最近産まれたばかりだ』

『そっかあ』

でも、迷子なのに、何で最近産まれた子どもの事を知ってるの？』

『……………』

『バーダックさん？』

バーダックは、自分に起こった事を話しはしなかった

もしここが過去の世界で、ここが昔の惑星ベジータなら、自分達サイヤ人はこの星の者を滅ぼしてしまうのだ

多少の後ろめたさと、罪悪感から、自分の事、自分の種族の事を話す事が出来なかつた

そして、ある程度の時間が過ぎ、ベリーは帰って行った  
『俺は、どうしちまつたんだ…』

俺達サイヤ人は、戦う事が生き甲斐なはずだ…

俺だつて何人も殺し、幾つもの種族を滅ぼしたじゃねえか…  
なのに今更…』

自分を襲つた感情に、バーダックは戸惑つていた

今まで誰かを殺しても、こんなふうを感じる事はなかつた  
だが今は、自覚を持てる程の後悔と罪悪感を感じていた

『……寝るか』

翌日、バーダックは身体の傷も癒え、絶好調だった

そこへ、血相を変えたベリーが、息を切らしながら走つて来た  
『バーダックさん！』

あの、また村に宇宙人が来て…』

『……興味ねえよ』

『でも、バーダックさんをさがしてるみたいで……』

『俺を?』

はたして、この何処とも分からない星で、自分を探す者などいるのか?  
バーダックには、まったく心当たりがなかった

『その人達、すごく怖くて…』

僕、何だが嫌な予感がするんだ…』

ドカーンツ!!??!!??

話の途中、村の方から爆発が起こった

『何だっ!??!?』

『きつと、さっきの人達だ!!?』

バーダックさん、お願い!

村の皆を助けて!!?』

お願い、お願い!

このままじゃきつと、村の皆が…!』

ねえ、バーダックさん!!?』

ベリーは、そう言いながらバーダックに泣きながらしがみついて来た

『…俺には関係、』

そこまで言うのと、バーダックの頭の中に、今まで死んでいった仲間達、救えなかった仲間達が、脳裏に浮かんだ

『バーダックさん！』

村の人や父ちゃんを助けて!!？

ねえ！

ねえ!!？』

そして、礼を言いながら近寄ってくる村人達を思い出した

バーダックは、胸が熱くなるのを感じた

『…っ

どけい!!？』

『うわっ!!？』

バーダックはベリーを引き剥がし、村に向かって全速力で飛んだ

『バーダックさん…』

村に着くと、多くの異星人が破壊行為を繰り返していた

自分達もあの様な事をしていたと思うと、胸が苦しくなった

しばらく行くと、二人の異星人に攻撃されそうないパナを見つけた

バーダックは高速で近づき、一人は蹴り倒し、もう一人は瞬で背後を取り、絞め殺した

『バ、バーダック!!?』

『バーダック?』

ああ君か、トービとキャビラを倒したって奴は…』

一人の異星人が、隠していた素顔を晒しながら近づいて来た

『ああつ!!?』

フリーザ!!?』

その素顔は、怨敵 フリーザによく似ていた

『ぐっ…!』

フリーザアア!!?』

『どわあああ!!?』

バーダックはいきなり殴りかかり、その異星人を吹き飛ばしたが、踏ん張った異星人に蹴り飛ばされた

『貴様あ!!?』

『おわあああ!!?』

『バーダック!!?』

たった一撃の蹴りで、バーダックはかなりのダメージを負った  
『くっ、何てパワーだ…！』

ふっ、ぐう………』

『雑魚のくせに、このチルド様に刃向かうなんて、生意気じゃねえか！  
ええっ!??!』

倒れたバーダックに近づき、頭を踏みながら異星人は話し出す

『フ、フリーザア…』

『さっきからフリーザ、フリーザって、失礼な奴だね』

ボクが誰だか分かってるの？

ボクは最強の宇宙海賊 チルド様なんだよ!??!』

『チ、チルド!??!』

やっと会えたと思った敵は、自分の探す者ではなかった

『(フリーザじゃねえのか？』

ここが過去だって言うなら、こいつは…

じゃあ、フリーザの!??!』

『やめないか！』

うわあ!!?!』

バーダックを助けようと近づいたイパナが、チルドの尻尾に吹き飛ばされた  
『父ちゃん!!?』

父ちゃん!』

バーダックの後を追って来たベリーが、イパナに近づく  
幸い、死んではいなかった

『ちくしょう!』

『あああ、お可哀想に…』

しかし、まったく、とんだ拍子抜けだったよ!』

そう言つてチルドは、バーダックを蹴り飛ばした

『うわあああ!!?』

『こんな弱い奴、もういらぬ!』

チルドは、フリーザのデスウエイブの様な技の体勢に入った

指先から、紫色に光る不気味な球体が現れた

『や、やめろお!!?』

チルドは、ベリー達を振り返り、不敵に笑った

『バーダックさああん!!?!!?』

ベリーは、バーダックを助けようと泣きながら走つて来る



『小僧、やめろお…！』

バーダツクの制止も聞かず、ベリーはただひたすら走って来る

『親子そろって…』

邪魔だよ!!?』

チルドはそう言うのと、ベリーに向かってデスウェイブを放った

直撃はしなかったものの、ベリーは後方の岩山に叩きつけられた

『『ベリーっ!!?』』

『まったく、どいつもこいつもゴミの分際で、出しゃばるからだ』

『ちくしょう…っ!!?』

『ん?』

へえ、まだ立ち上がれるんだ?』

バーダツクは、身体のダメージと共に、己の不甲斐なき、無力感、そしてチルドに、フリーザに、そして自分自身に怒りを感じていた

『情けねえっ…』

くっ、本当につ…

俺にもつと力があればっ!!?』

拳を強く握りしめすぎ、掌からは血が滴り落ちる

やり場のない怒りをぶつけるため、地面に頭突きを入れた

『あの時も』

バーダックの頭に、救えなかった仲間達の最後の姿が浮かんだ

『あの時も!!?』

次に浮かんだのは、フリーザを前にしながら、何も出来ずに惑星ベジータを破壊された時の光景だった

『ううううううっ!』

ぐっ、くうっ!』

バーダックは怒りが頂点に近づくのを感じた

その時、空の色は変わり、雷がひかり、バーダックのすぐ横に落雷が落ちた

そして、バーダックから身体をスパークが起きた

『俺が…』

俺がっ…

俺がっ…!

貴様を倒すっ!!?』

『ははははははっ、このボクを倒すだど?』

馬鹿め!』

『ううううううううっ!!?』

ううううううううううう!!?!!?』

バーダックの身体から、気が溢れ出した

地面は割れ、落雷は落ち、地震が起きた

そして、だんだんバーダックの容姿に変化が起きた

髪が逆立ち、髪色が黒から金色に変わりだした

瞳の色も黒から、淡いグリーンに変わった

『ふっふっふっふっふっふっ……』

ふっふっふっ、はーっはっはっはっはっ!!?』

チルドの笑う姿が、フリーザと重なったその時、バーダックの怒りが頂点に達した

プツチン!

『っ!』

ずああああああああああああああ!!?!!?!!?』

『何っ!!?』

バーダックは、とうとう伝説の戦士、超サイヤ人に目覚めた

身体からスパークが起こり、その凄まじエネルギーで、空間が歪んでいる  
『いったいこれは…』

この漲る様なパワーは…？』

『何だ、さつきまでとは様子が…？』

バーダック自身にも、自分が超サイヤ人になったという自覚はなかった

だが、今の自分はチルドよりも圧倒的に強いという事は分かった

それ故、まるで散歩でもする様にチルドに近づいた

『貴様は絶対に許さねえ…』

『たかが金色になったくらいで、いい気になるなよ!!?』

そう言うところチルドは、バーダックに連続気功弾を食らわせた

砂煙りが上がり、何も見えなくなったが、チルドは決まったと思った

『ふんっ、金色になっても、何も変わらないじゃないか！』

ふんっ、口ほどにもない…

ええっ!!?』

チルドは目玉を飛び出して驚いた

バーダックが平然としながら、更に歩み寄って来たのだ

傷付いたのは服だけで、バーダック自身は無傷だった

チルドはムキになり、バーダックに殴りかかったが、いとも簡単に攻撃を止められ、掴まれた拳を振りほどく事すら出来なかった

『くそおおお!!?』

どうなってるんだ!!?

な、何者なんだ、貴様!!?』

『…俺は、ただの、サイヤ人だ』

『サ、サイヤ人だと!!?』

『覚悟はいいな?』

『ぐっ!!?』

次の瞬間、チルドはバーダックの猛攻にあった

地面に叩きつけられ、殴られ、更に地面に叩きつけられ、投げ飛ばされ、また投げられ、最後に上空に蹴り上げられた

が、チルドも何とかふんばり、空中で制止した

『くそおおお!!?』

認めない、認めないぞ!!?』

ちくしよおおお!!?』

ボクは宇宙海賊 チルド様だぞお!!?』

ボクより強い奴なんて、この世に居てはいけないんだあ!!?」

チルドは、スーパーノヴァを作り出した

『いつまでも寝言ほざいてんじやねえ!』

対するバーダックも、リベリオントリガーを撃つ姿勢をした

『この小汚い星ごと、みんな死んじまええ!!?!!?』

『死ぬのは、てめえだああああ!!?!!?!!?』

チルドのスーパーノヴァと、バーダックのリベリオントリガーがぶつかつた

最初は互角と言つた感じだったが、直ぐに均衡は破れ、リベリオントリガーが押し出した

『くたばれええええ!!?!!?!!?』

そしてフルパワーになり、一気にスーパーノヴァを打ち破つた

『そんなつ!!?』

このボクがあああああああ!!?!!?!!?』

チルドはリベリオントリガーに宇宙まで押し出された

バーダックは、ただ空を見上げていた

くチルドの宇宙船く

『チルド様：』

チルドは、奇跡的に生きていた  
が、力尽きるのは時間の問題だった

『い、一族に伝えろ。』

金色に変化する、サイヤ人には、気をつけろ、と……………  
そう言つて、チルドは力尽きた……………

く惑星プラントく

『バーダックさん：』

ベリーは、生きていた

幸い、大した怪我もなかった

『……………』

『ごめんなさい、迷惑かけて……………』

『ベリー……………』

『は、はいっ』

『… ありがとな』

『えっ?』

バーダックは、微かに微笑んだ

すると、バーダックの身体が光に包まれた

『バーダックさんっ!!?』

『… 俺は、俺の居たところに戻る』

『そ、そんなっ!』

『ベリー…』

『バーダックさん…』

『ベリー、おめえが持つて来てくれた飯、美味かったぜ…』

ありがとな、ベリー…

… またな』

『バーダックさんっ!!?』

バーダックさんっ!!?!!?!!?』

ベリーは必死にバーダックの名を叫んだ

バーダックは、ただ微笑みながら手を挙げ、そして光に包まれ、消えて行っ



た……………

『っは？！』

次にバーダックが目を覚ますと、そこは惑星ベジータの遥か上空、フリーザに惑星ベジータを破壊される少し前の時間に戻っていた

『（こ、これはいつたい…）』

バーダックは、自分の身体を確認した

傷はあるが、大してダメージはない

むしろ、フリーザを目の前にしても恐怖がない

そして、自分の内に眠るパワーも、まだ健在だと確認した

『(どうやら俺は、あの星でかなり強くなって帰ってきたみたいだな)』

バーダックは確信した

今ならフリーザに勝てると

『ふっ、これで、全てが変わる…』

この惑星ベジータの運命…

この、俺の運命…

そして、貴様の運命もっ!!?』

あの時と同じ状況になった

バーダックはライオットジャベリンを、フリーザはスーパーノヴァを構えた

『これで最後だああああ!!?!!?!!?』

『ほっほっほっ!!?』

ライオットジャベリンとスーパーノヴァがぶつかった

そして、一瞬でスーパーノヴァを打ち消し、フリーザはライオットジャベリンに飲み

込まれた

『なっ!!?』

そんな、馬鹿なああああ!!?』

フリーザを飲み込んだライオットジャベリンは、遙か遠くに飛んで行った。そして、残った兵士は逃げ出すか、応援に駆けつけたサイヤ人と交戦、あるいは投降した。

ザーボンやドドリアは、隙を見つけ逃げ出した

『やったな、バーダック！』

『おう、トーマ』

『まさか、あのフリーザを倒しちゃうなんて…』

あんた、ほんとにバーダックかい？』

『……………色々あったんだ』

バーダック達は残った兵士を片付け、惑星ベジータに帰った

『…ギネ』

『バーダック!!?』

バーダックは帰宅すると、ギネが泣きながら抱きついてきた

いつもなら引き剥がすが、今日は、抵抗しなかった

『バカバカ、心配したんだからっ！』

『…ああ、すまねえ』

それだけ言うと、バーダックはギネの頭を撫でてやった

そして、  
顔を上げた妻の唇に、  
キスを落とした

## 守護者サイヤ人？

バーダックがフリーザを倒して三日がたった

サイヤ人達はフリーザ達にめちやくちやにされた惑星ベジータの復興に力を入れていた

バーダックも帰還したラディッツと共に復興作業をしていた

『ラディッツ、その岩持つて来い』

『ちっ、人使いが荒いなあ』

『あ、何か言ったか？』ギロツ

『い、いや、別に…』

ラディッツはバーダックが少し苦手だった

反面、戦闘力が高く、サイヤ人の間でも有名な父を尊敬もしていた

『……』

『どうした、親父？』

バーダックが手を止め、何かを考えだした

『なあ、ラディッツ…』

俺は、どうしちまつたんだろうな…』

『な、何が?』

父が何を言いたいのか、ラディッツにはわからなかった

『…俺達はサイヤ人だ

戦いこそが生き甲斐だ

でも、俺は…』

『…?』

父の言わんとする事が、幼いラディッツにはわからなかった

『俺は、戦いは好きだ

だが、あんな事があっちゃあ、俺は…』

『…』

ラディッツは、ただ父の話を聞くしかできなかった

バーダック達は作業を終え、帰宅した

いつも通り夕飯を食べ、いつも通りの時間に寝床に入った

だが、バーダックは眠れなかった

何となく外に出て、空を見上げていた

そして、あの民族の事を、思い出していた

『……イパナ、ベリー……』

この気持ちは何なのか、バーダックには分からなかった

ただ、このままではいけない

何故だかそう思った

『俺は……』

『バーダック……』

『……ギネ』

いつの間にか、ギネが後ろに立っていた

『どうしたの、こんな時間に……』

『……』

『バーダック、何を悩んでるの?』

ギネには、何となくバーダックが苦しんでいるというのが分かっていた

だからこそ、バーダックはギネの気持ちに甘えた

『……ギネ、今から話す事は、別に聞き流してもかまわねえ』

『わかったわ』

『…… この惑星ベジータは、一度フリーザの攻撃で消されたんだ

俺はその時に、過去の惑星プラントに行ったんだ

そこで俺は、俺を恐がらねえで近寄ってくる、礼を言ってくる連中に会ったんだ』

『……』

ギネは、黙ってバーダックの話を聞いていた

バーダックはそれを確認し、話を続けた

『そこで俺は、変なガキと会った

俺によく懐いて来やがってよお……

その時代にもフリーザみてえな野郎がいたが、たぶんそいつもフリーザも、あのガキのおかげで倒せたんだ』

『……』

『そんな時に、思ったんだ……

俺は、このまま地上げなんざをやっているんだらうかってよお

サイヤ人のくせして、何を今更って事は分かってんだが、どうしても頭からあいつらの顔が離れねえんだ』

『…… バーダックは、どうしたいの?』



ギネは、バーダックの意思を聞いた

彼女は、きつとバーダックが選んだ選択なら、何も言わず背中を押ししてくれるだろう  
だからこそ、バーダックは自分の気持ちと話した

『…俺は、サイヤ人に地上げを辞めさせてえ

地上げ屋サイヤ人じゃねえ

あんな風に、誰かを助けられる様になりてえ

だから、俺は…』

『…』

『…サイヤ人を、変えてみせる』

『…バーダックの考えは、わかった

私は、バーダックのやる事なら、何だって応援するよ

だって、夫婦だもん…

私は、バーダックが好きだから…』

『ギネ、お前、この話を信じるのか？』

『ええ…』

さっき言ったでしょ？

私は、バーダックが大好きなの

だから、貴方を信じる……」

『ギネ……』

バーダックは、ギネが堪らなく愛おしくなった

彼女がいてくれるなら、自分は神にも戦いを挑めるとすら思った

翌日、バーダックは仲間に自分の考えを話した

しかし、誰もが鼻で笑い、バーダックの話を聞かなかった

息子のラディッツですら、過去に行ったなど、信用しなかった

それからバーダックは、白い眼で見られ始めた

いくらフリーザを倒した英雄とは言え、自分達サイヤ人の本質を否定する様な事を声高に言ったのだ

トーマ達ですら、バーダックがおかしくなったと思っていた

本来、こんな事をすれば容赦なくベジータ王子に消されるところだが、今のバーダックはフリーザを超える強さを持っている

とても手が出せなかった

だからこそ、誰もバーダックを表立って責めたり、批判したりはしなかった

『ちくしょう……』

やっぱ、ダメなのか…？

サイヤ人を変えるなんざ、俺には無理なのか……？』

『バーダック……』

しかし、バーダックは呼びかけを止めなかった

一人でも、自分に賛同してくれる者がいる事を信じて

すると…

『バーダック…』

『… お前ら』

そこには、トーマらバーダックのチームメイトの他に数十名のサイヤ人がいた

『… どうした？』

『… 俺達と戦え』

『あ？』

トーマ達は、バーダックに戦いを挑んできた

相手は50名はいよう

それを一人で相手にするのは、無謀だ

…… バーダックがサイヤ人のレベルを遥かに超え、超サイヤ人でなければ

『俺達全員を倒せたら、お前について行ってやる』

『…今の俺は、お前ら全員を相手にしても勝てるぞ?』

『さあ、どうだろうな!!?』

『っ!!?』

戦いは始まった

トーマ達は、バーダックを近づけまいと気功弾を連射している

だが、バーダックはそれを高速でかわし、一人ずつ気絶させていき、5分もかけずに全員を気絶させた

意外な程に呆気なく決着がついた

バーダックは、強くなり過ぎていたのだ

(けして作者の手抜きではない)

『…トーマ』

『ちっ、負けたぜ!』

『しゃあねえ、お前についてやるよ!』

『だが…』

『バーダック、トーマはあんたの必死な所を見て、あんたについてみたくなったんだよ』

『セリパ、余計な事言うな!』

『お前ら…』

ここに居るサイヤ人は皆、バーダックの意見に賛同した者達だ  
サイヤ人にも少数ながら、善人はいたのだ

『しかしお前、本当に強くなったな』

もしかしてお前がああのだの伝説の超サイヤ人じゃねえのか？』

『…これのことか？』

バーダックはトーマ達の前で超サイヤ人に変身した

バーダックは誰かを護つてみせると決めた日から、毎日欠かさず修行をし、自由に超サイヤ人になる術を身につけた

また、色んな星に行き、色んな戦士と戦い（命懸けではなく、試合）、気のコントロールの仕方や、気の探り方を身につけた

『…こいつはすげえ！』

これなら誰にも負けねえぜ！

よしバーダック、お前に全て預けるぜ！』

こうしてトーマ達は仲間になり、総数50余人の革命軍が結成された

『…イパナ、ベリー、見てろよ………』

その日の夜、バーダックはまた空を見ていた

『……………』

『…君がフリーザを倒したのか?』

『なっ!??』

いつの間にかバーダックの後ろに、猫の様な異星人と、白髪の青年が立っていた

『き、貴様は!??』

(まったく気を感じなかった…。)

『僕はビルス、この宇宙の破壊神だよ』

『どうも、ウイスと申します』

『は、破壊神 ビルスだと!??』

そこには、この宇宙最強の存在が立っていた

『君、フリーザを倒した後、サイヤ人を変えたらしいね

すごいね、あのフリーザを倒すなんて…』

と、言いたいところだけど、まだフリーザは生きてるよ』

『な、何っ!??』

『今フリーザは、貴方にやられた傷を癒し、貴方に復讐する時に備えています  
あと、フリーザは変身型宇宙、変身するたびに強くなります』

『まあ、僕の敵じゃないけどね』

何と、あのフリーザが生きている

しかも、まだまだ強くなると、この最強の存在は口にした

しかし、バーダックには恐怖はなかった

『…そうか』

『おや、驚かないのかい？』

『今の俺はフリーザより強い』

『見ていたよ』

君、超サイヤ人とか言うのに変身できるんだろ？』

『… まあな』

『そうか』

じゃあ、これを聞いても平気でいられるかな？』

『？』

『フリーザにこの惑星ベジータを破壊する様に言ったのは、この僕なんだよ』

『なっ!?？』

ビルスが口にした言葉は、バーダックには衝撃だった

この星を宇宙の帝王と呼ばれたフリーザに命じたのは、宇宙最強の神だった

『…っ』

『ん?』

『貴様あ!!?!!?』

バーダックは、ビルスに襲いかかった

しかし、ビルスにはバーダックの攻撃はかすりもしなかった

『くそお!!?』

『どうした、超サイヤ人にならないのかい?』

『黙れえ!!?!!?』

バーダックは、超サイヤ人になろうとしなかった

変身しない状態で戦い続けた

『ほお、大した戦闘力だ』

『オラア!!?』

ドカーンッ!!?!!?!!?!!?



バーダックのパンチはビルスを外れ、岩山に当たった

岩山は完全に砕け散り、雨の様に岩が降ってきたが、二人は気を高め、降ってくる岩を更に砕いた

『… 何故変身しない？』

『… 俺は、素のままですごく強くなりてえんだ

変身した俺じゃねえ、今のままの俺で強くならなきや意味ねえんだ』

『ほお、大したプライドじゃないか』

『けっ…』

だりやあ!!?!?!?!?!?!』

その後も戦いは続いた

しかし、ビルスは攻撃をかわすだけで、一度も打ち込んでこなかった

『はあ、はあ、はあ…』

何故、攻撃しねえ…？』

『いや、何となくだよ』

『へっ、やつはまだあんたと戦うには、俺は弱すぎるみてえだな』

『そうだね』

だが、君の事気に入ったよ

もし、もつともつと強くなれたら、このウイスに君を鍛えさせよう』

『な、私がですか!??』

『… いいのか?』

『もつともつと強くなれたらね』

『あ、あんたは、いいのか?』

『… まあ、ビルス様が寝ている間は暇なので、構いませんよ』

何と、あの宇宙最強の存在に気に入られ、しかも自分を鍛えてくれるとまで言ってもらえた

バーダックは、必ずビルスに認められる程強くなると誓った

『それじゃあ、もう行くよ』

サイヤ人、変えられるといいねえ』

『頑張つて下さいね』

サイヤ人が変われば、ビルス様も惑星ベジータの破壊を止めるかもしれませんからねえ』

『… ああ』

『… 次に会う時は、もつと僕を楽しませてね』

『… ああ、絶対な』

そして、ビルスとウイスは光になり、飛んで行った

その速さは、超サイヤ人に覚醒したバーダックですら目で追えないスピードだった

『(…次は、こうはいかねえぜ?)』

バーダックは、二人の激励の言葉を胸に、改めてサイヤ人を守護者にしてみせると誓った

『ところでビルス様、何故あのサイヤ人が気に入られたのですか?』

『…予感がするんだ

あいつは強くなる

いつか僕の強敵になるって

あれはたぶん、修行すれば、そう遠くないうちに僕やお前以外の者を除けば、あいつに敵うものはいなくなると予想した』

『それでしようか?』

『まあ、弱かったら破壊しちゃうけどねw』

『しかし、確かに彼は強くなるでしょうねえ』

あの変身に頼らないプライド、そしてハングリーさは魅力です』  
『楽しみだねえ…』

さて、んじや僕は30年くらい昼寝するよ

えっと、目覚まし爆弾セットしとこ…

んじやウイス、おやすみ〜』

『あ、ビルス様』

寝る前に歯磨きを！』

『ん、はいはい…』』

ウイスはビルスに歯磨きをさせてから、寝かした

そして

『予言魚、いますか？』

『何？』

『バーダックと言うサイヤ人の未来を予言して欲しいのですが』

『うん、いいよ』

うゝん

そのサイヤ人はねえ………』

## 外伝 出逢い

惑星ベジータでは、大きな戦いが起ころうとしていた

その理由は、バーダックが、サイヤ人の生き方に異を唱えたからだ

今、ベジータ率いる侵略派のベジータ軍と、バーダック率いる侵略反対派の革命軍が、ぶつかろうとしていた

しかし、バーダックには戦いの前に、やらねばならぬ事があつた

『……ラディッツ』

『……何だよ』

バーダックの息子 ラディッツは、父の意見に素直に賛成出来なかつた

彼は、サイヤ人である事にプライドを持ち、戦いに生き甲斐を感じているのだ

『戦いたいだけなら、別に地上げ屋じゃなくても出来るだろうが』

『……』

『ラディッツよお……』

『……ちよつとだけ、時間くれ』

ラディッツはそう言うと、どこかへ飛んで行ってしまった

バーダックは、何も言わず、ただ息子の背中を見送った

ラディッツは一人、街から少し離れた岩山に来ていた

ここはよく、バーダックに鍛えられた場所だ

ラディッツは、父のサイヤ人としての教えを守り、戦い、奪い、そして、殺して来たそれを教えた本人が今更辞めろなどと、ラディッツは父の考えが分からなかった  
そして、自分がどうしたいかも……

『……俺は』

ラディッツは、頭を悩ませた

まだ5歳のラディッツには、仕方ない事ではあるが

『どうしたの?』

『っ!?』

声に振り返ると、そこには一人のサイヤ人の女の子が立っていた

歳は自分と変わらないと見えるが、美しいストレートの黒髪を背中まで伸ばし、その瞳は、まるで黒真珠の様に美しかった

とても、戦闘民族の子どもとは思えない美しさがあった

『……』

『ん、どうしたの?』

『あ、いや……』

ラディッツは、この娘のあまりの美しさに、思わず見惚れてしまった  
それを隠す様に、この娘から目をそらした

『……お前こそ、こんな所で何やってんだ？』

『ああ、私はただの散歩』

散歩？

こんな何もないただの岩山に、こんな娘が一人で？

『私ね、ここに来ると、力が貰えるの』

『……』

ラディッツは、黙って話を聞いていた

『何か落ち込んだり、嫌な事があると、いつもここに来るの』

ここは、私の憧れの人が、よく修行しに来る所だから』

この場所は、自分と父以外誰も使わない

と言うことは、この娘は父に憧れているのか



なら、今父が声高に叫んでいる事がどんな事なのか、知っているはずだが？

『……どんな奴なんだ？』

『その人はね、頑張り屋さんで、いつも一生懸命で、何度倒れても、必ず立ち上がって、そして、また目標に向かって走り出す、そんな人なの』

『……？』

ラディッツは、一瞬考えた

確かに父は、頑張り屋と言えば頑張り屋だ

昔一度ベジータ王に挑んで負けてから、いつもトレーニングを欠かさなかったし、トレーニングも仕事も一生懸命と言えば一生懸命だった

だが、ここではトレーニング相手は、自分しかいなかった

自分より強い父が、この場所で倒れた事など一度もなかったでは、誰の話をしているのか？

『私ね、昔に頭を強く打って死にかけてた事があるの』

その時から、戦いは嫌いじゃないけど、命を奪うやり方が、いけない事だって、考え

るようになったの

だから私は、周りから疎まれた

死のうかと思う事もあつた

でも、たまたまここに来て、その人を見て思つたの』

ラディッツは、もしかしたら、という考えが、頭に浮かんだ

『その人は、歳は私と変わらない様に見えたわ

いつも強いお父さんとのトレーニングでボロボロになって、それでもいつも真剣で、何度倒れても立ち上がった

その姿を見て、思つたの

この人は、ただ、強くなりたいんだなって

だから、あんなにボロボロになつても、立ち上がつて行けるんだなって

私には、それが出来なかつた

打たれても立ち上がる勇気が、私にはなかつたの

だから私、その人みたいに強い心を持ちたいって、勇気を持ちたいって思つたのだから今、こうして生きてるの』

『……』

ラディッツは、確信した

この娘が言っている人物は、間違いない自分だと

それが分かったラディッツは、嬉しさ半分、負い目もあった

『……それは、たぶんお前の勘違いじゃないのか？』

『えっ？！』

『そいつが強くなりたくて、真剣にトレーニングをしていたのは、本当だろう

でも、そいつは、そんなに強い心は持ってないんじゃないか？

この前のフリーザの攻撃とか、今の内乱で、そいつはたぶん、自分の弱さ知って絶望したり、自分のやりたい事が分からなくて悩んでるんじゃないか？』

ラディッツは、後から言った事に後悔した

こんな言い方では、あなたの言っているのは自分です

自分は今、悩んでいます

こう言っているみたいじゃないか、と

『……かも、しれないね』

『じゃあ……』

『でも、それでいいんじゃないかな？』

『えっ？』

ラディッツは、一瞬、この娘が言った言葉が分からなかった

『私、さっき言ったでしょ？』

その人、歳は私と変わらないって

じゃあ、別にいいじゃない、悩んだって

だって、私達はまだ子どもだもん

何でも出来るわけないし、自分の事も、まだ分からないよ

きつと、大人だってそうだよ』

『……』

『そうやって悩んで、自分と向き合おうとする、自分と向き合う事が出来るんだから、やっぱり強いよ、その人は♪』

『……』

この娘の言った言葉は、ラディッツにとって救いだった  
ラディッツは、涙が出そうなのを必死に堪えた

『……そう言う、もんなのかな？』

『分からないけど、私はそう思うよw』

『……ありがとう』

『どういたしましてw』

ラディッツは、顔つきが変わった

そして、父と話す事を決心した

『すまん、俺、行くわ』

『頑張つてね』

『ああ』

『……なあ、名前、聞いてもいいか？』

『もちろん！』

私はセロリ、普段は食堂の仕事をお手伝いしてるのw  
たまに来てねw』

『ああ』

俺は、ラディッツだ』

『いい名前だね』

頑張つてね、ラディッツ！』

『おうっ！』

じゃあな！』

ラディッツは、セロリと別れ、自分の家に飛んで行つた  
父に会うために

そして、自分の答えを、見つけるために

『親父っ！』

『ラディッツ……』

『あら、ラディッツ

どうしたの？』

バーダックとギネは、一目でラディッツの顔つきが変わったのを見破った

その顔が、男の顔になっているのを見て、バーダックもギネも、微かに微笑んだ

『親父、俺と勝負しろ！』

『……上等な口利くじゃねえか

ええ、ラディッツよお』

初めて息子から勝負を挑まれたバーダックは、少し嬉しかった

ギネも、何だかほっこりした気持ちになった

『いつもの岩山行くぞ

そこで揉んでやる』

『おうっ』

『二人共、無茶しないのよ?』

ギネは、笑顔で二人を見送った

岩山には、まだセロリがいた

まるで、二人がここに来る事が、分かっていたかのように

『……あのムスメは誰だ?』

『お、俺の友達だっ』

『……へっ、そうかよ』

でも、ダチの前だからって容赦しねえぞ?』

『の、望むところだ!!?』

バーダックは、ラディッツの面構えが変わった理由を察して、微笑を浮かべた



そして、二人の戦いははじまった

『うわあ!!?』

『どうしたラディッツ、もう終いか?』

『っ、だああ!!?』

勝負は、終始バーダック優位だった

ラディッツは、何度も倒され、投げられ、撃たれた

しかし、何度でも立ち上がった

ボロボロになり、ろくに力も入らない身体に鞭を打って

『(くそっ、せめて一発くらい入れなきや気がすまねえ!)』

『これで終いだっ!』

『っ!!?』

バーダックが、ラディッツに右拳を放つ

ラディッツはその拳を、自らの左手の捻りで軽くいなし、

最短距離で拳を突き出し、バーダックの顎を掠めた

『っ』

『なっ!??!?』

バーダックは、一瞬フラついた

威力のないパンチでも、角度と当てるポイントによつては、脳震盪を起こす  
ラディッツのパンチは、一瞬相手をフラつかせるには充分だった

『だあ!!?!?』

『っ』

『なっ!??!?』

しかし、そこは流石歴戦の猛者 バーダックだ

フラつき、倒れそうになったが、ラディッツの追撃に反応した

啜う膝に力を入れ、何とか倒れずに、ラディッツの追撃をかわし、パンチを入れた

『ぐはあ!?』

『へっ』

ラディッツは、気を失った

バーダックは、その場に座り込んだ

『(ちっ、女の前だと張り切りやがってよ

親も楽じゃねえや)』

いつもの間にか、セロリがラディッツの側まで来ていた

バーダックは、セロリの顔を見て、少し微笑んだ

『そいつの事、任せたぞ』

『・・・はいっ』

それだけ言うと、バーダックは飛んで行った

セロリは、バーダックの背中を見送った

少しして、ラディッツは目を覚ました

『……また負けちまったか』

『そうだね』

『っ!?』

ラディッツは、セロリがいた事に気付かずにいる  
だから、いきなり声をかけられて、思わず飛び退いた

『ど、どうしたの!?』

『あ、いや……』

ラディッツは、ドギマギした

セロリは、そんなラディッツの気など知らず、ラディッツの隣に腰掛けた

『……お父さん、強かったね』

『……ああ、何せあのフリーザを倒した男だからな』

『でも、一回パンチ当てたじゃない!』

『……偶然だ』

『それでも、すごいよ!』

これからも諦めないで頑張れば、きつとお父さんみたいな強い人になれるよ!』

『……そうかな?』

『うんっ!』

ラディッツは、何だか照れくさくなり、俯いた

セロリは、頭にハテナを浮かべたが言葉を続けた

『ラディッツのお父さん、今、人殺しはダメだって、みんなに話してるんでしょ?』

『……ああ』

『私は、素敵な事だと思うし、そんな事がみんなに言えるのは、すごい事だと思う』

『……』

『ラディッツは、どう思う?』

『……よく、分からなかった』

俺は親父に、サイヤ人の生き方を教えられて、その通りに生きてきた

『なのにも今更、それは間違いだなんて言われても、俺には納得出来なかった』  
『ラディッツ……』

セロリは、ラディッツが一瞬見せた苦しげな表情に  
そして、やはりラディッツはサイヤ人なのか  
と思うと、少し不安になった  
しかし、

『でも、さつき親父と戦って

セロリと話して思った

やっぱり俺は、今でも親父に憧れてるんだって

だから、そんな憧れの親父について行きたい

それで、親父に認められたい

親父を超えたい

だから、俺は……』

『……』

『俺は、親父と一緒にサイヤ人を変える！』

『そっか』

うんっ！

ラディッツなら、出来るよ！』

ラディッツはまた照れくさくなり、俯いてしまった  
だがすぐに顔を上げ、意を決した様に話した

『だ、だから、応援してくれ！』

セロリが応援してくれたら、俺は

俺は何でも出来る気がするから……！！』

『ラディッツ……』

『ダメ、かな？』

ラディッツは一瞬、不安になった

しかし、セロリは笑顔で言葉を綴った

『うんっ！』

応援するよ、ラディッツのこと！』

『あ、ありがとう！』

『それから……』

『？』

『私も、ラディッツと一緒にサイヤ人を変えたい！』

『えっ!!?』

セロリは、自分も革命軍に入ると言ってきた

それにはラディッツは驚いた

『ダメ?』

『いや、そんな事ないよ!』

ラディッツは、セロリを危険な目に合わせないか不安だった

まあ、実際に子どもをベジータ軍と戦わせようとは、バーダックは考えていないので、この二人が死ぬ様な事はないのだが

『わかった!』



よろしくな、セロリ！』

『うんっ！』

よろしくね、ラディッツ！』

こうして、二人の戦いははじまった

ラディッツは、何があっても、彼女は自分が守ると、その小さな胸に硬く誓った

## ベジータ紛争

これは、宇宙の彼方、惑星ベジータで起こったサイヤ人史上最大の内乱後に、宇宙の歴史の教科書に載る程の戦いが、今、始まろうとしていた

『バーダック、いよいよだな』

『正直、数はあちらの方が上だ』

間違いない、苦しい戦いになる……』

『だろうな』

でもよお、トーマ、俺はやっぱりサイヤ人だ

こんな時だつてのに、楽しみで仕方がねえ

早く、戦いてえ』

『まったく……』

頼もしいと言うべきか、イかれてると言うべきか……

だが、頼りにしてるぜ、バーダックよお』

バーダックは、高ぶる気を抑えるのに必死だった

ここ最近、まったく実戦をしていなかったバーダックは、ある種の欲求不満だった  
命を奪う事に反対はしても、やはりサイヤ人の本能とも言うべき戦闘好きまでは消え  
なかった

『よしお前ら、行くぞっ!!?!!?』

思う存分、暴れて来やがれ!!?!!?!!?!!?』

『おおおおおおお!!?!!?!!?!!?!!?』

戦いは、始まった

先手必勝

バーダック達は、ベジータ達のいる城に奇襲をかけた

ベジータ達は、待っていたと言わんばかりに、バーダック達を迎え撃った

『相手は所詮、腑抜けた下級戦士共だ!!?』

実力の差を思い知らせてやれ!!?』

『戦いに、名門も糞も関係ねえ!!?』

気合い入れろよお前ら!!?』

両軍は、激しくぶつかった

革命軍は主戦力のバーダックのカバーに徹した

バーダックは凄まじいスピードで敵軍を蹴散らし、戦況はバーダック達に傾いた

その時、一人のサイヤ人が、バーダックに挑んできた

『よお、バーダック』

『てめえか、クソレタス』

彼の名はターレス

バーダックと同じ下級戦士で、バーダックと瓜二つの顔を持つ男だ

違いと言えば、バーダックと違って顔に傷はなく、バーダックに比べて肌が黒いところだ

『あの戦闘狂　バーダックが、まさかこんな下らない理由でドンパチ起こすたあ、俺も予想外だったぜ』

『てめえみたいなイモ野郎にやあ、俺の気持ちなんざわかんねえよ』

この二人は、俗に言う『犬猿の仲』だ

顔も声も似ている互いが、どうしても気に入らなかった

『バーダック、俺はお前を、少しは骨のある奴だと思ってたんだが、どうやら俺の勘違いだったみたいだ』

『俺はお前の事を、だったのいけ好かねえ野郎としか思ってたがな』

『そいつは……』

ターレスが、バーダックに迫った

『お互い様だ!!?』

『っ!!?』

ターレスも、バーダックと同じく下級戦士の中では異端の戦闘力を持っていた

しかし、今のバーダックの敵ではなく、ターレスが放ったパンチをかわし、ボディに膝を入れて、気絶させた

『がはっ？！』

『悪いな、今の俺には、てめえなんざ敵じゃねえんだ』

ターレスを倒し、バーダック達は勢いに乗って、更に進軍した

そして、一気に距離を詰め、敵の大將であるベジータを狙った

敵の兵が、ベジータに近づけさせまいと抵抗したが、バーダックはかまわず突破した  
そして、ベジータの眼前に迫った

『(勝った！)』

バーダックは、勝利を確信した

だがこの時、バーダックはいくつかミスをしていた

味方を自分のフォロワーに専念させた事

敵の兵を、まったく警戒しなかった事

そして、敵の大將、天才児 ベジータを、まだ子どもと侮った事だ

『これで終いだ!!?』

『ふっ』

『っ!!?』

バーダックは、ベジータに攻撃する寸前で、動きを止めた

いや、止められた

よく見ると、自分の身体中に、気でできた糸が絡み付いていた

『こ、これは!!?』

『はっはー!!?』

警戒を怠ったな!!?

俺が何の作戦も無しに戦争などすると思っただか!!?』

これは喧嘩ではないのだ

いくら戦闘力が高くて、力押しだけで勝てるとは限らない

しかも、相手は天才児 ベジータなのだ

いくら戦闘力が高くても、せいぜい1万と数千

大人のサイヤ人が束になれば、勝てない程ではない

そんなベジータが、屈強なサイヤ人の戦士達を束ねられたのは、その統率力と戦術眼  
故だ

『くっ、くそお・・・！』

こんな技、誰が!?!?』

よく見ると、糸を出していたのは、サイヤ人とは違う種族の者達だった

彼らはジャコ星人

戦闘力は低いが、強力な超能力が使える種族だ

一人ではバーダックを抑える事は出来ないだろうが、周りのジャコ星人は10人程い  
る

戦闘力が数百万はあろうバーダックを縛り付けるには、10人程いれば不可能ではな  
かった

ましてやこの糸は、縛り付けた者のエネルギーを吸い、更に強度を増す



そんな糸を10人から食らえば、流石のバーダックも身動きが取れなかった

『くっ、動けねえ……!』

『惨めだな!』

貴様はそこで、味方がやられるのを見ていろ!!?』

『や、やめろおおおお!!?!!?!!?』

ベジータ達は、残った兵を掃討した

そして、敗北を悟った大半の兵は投稿した

こうして、後に第一次ベジータ紛争と呼ばれるサイヤ人同士の戦いは、革命軍の敗北に終わった

『くっ……』

ち、ちくしよお……

ちくしよおおおお!!?!!?!!?!!?!!?!!?』

バーダックの叫びが、空に響いたが、それは虚しく、爆音にかき消された

## 親子の絆

バーダックが、戦いに敗れたその日、革命軍の半数は死に、残り半数は、捕らえられた

バーダックは、公開処刑までの間、ずっとジャコ星人の糸に、縛られていた

『くっ……』

この糸は、相手の気を吸収し、強度を増す

バーダックは、気のほとんどを吸収され、意識を保つだけで精一杯だった

腕力で引きちぎる事はおろか、気で吹き飛ばす事も、変身する事も出来なかった

『な、情けねえ……』

バーダックは、己の不甲斐なさに、身を震わせた

己の浅はかさのせいで仲間はずれに、生き残った仲間も、明日処刑される  
今の自分の強さに、絶対的な自信があつた

それが、このザマだ

悔やんでも悔やみきれなかつた

『すまねえ……』

今できたのは、ここにいない仲間を、懺悔する事だけだつた

『バーダック……』

『……』

その頃ギネは、バーダック処刑の報を聞き、心を痛め倒れた  
ラディツツは、そんな母の世話をしていた

『どうすんだよ、親父……』

サイヤ人を変えるんじゃないのか？』

ラディッツも、あの偉大な父が処刑されるなど、信じられなかった

そして、父と共に戦い、父と共にサイヤ人を変えろと言いながら、何も出来ない自分を歯痒く思っていた

『……くそっ』

ラディッツは、またバーダックとよく修行した岩山に行った

そこで一人、歯痒さを忘れるために修行した

『ふっ!!?』

やあ!!?』

でやあ!!?』

修行を始めて三時間ほど経った

すると、近くに置いていたスカウターから、通信を知らせる音が聞こえた

『ちつ、誰だよ』

『お袋か?』

ラディッツは、しぶしぶ通信に出ると、相手はいきなり大きな声で話しかけてきた

『ラディッツ!!?』

お父さんが負けて、明日処刑されるって本当なの!!?☒』

キーン……

いきなりの大声に、ラディッツは耳鳴りを覚えた

『セロリか……』

ああ、本当だよ……』

相手は、セロリだった

正直、ラディッツはバーダック処刑の報を聞かされ、すぐにもセロリに会いに行きたかった

だが、父親の事で女の子に泣きつく事など、ラディッツのプライドが許さなかったから、向こうから連絡をくれたのは、とても嬉しかった

『そんな……』

お母さん、大丈夫？

ラディッツも、落ち込んで……

るよね、ごめん……』

『いや、大丈夫だ』

お袋は、流石にショックで倒れちゃったよ』

『そうだよね……』

ラディッツは、何してるの？』

『いつもの所で、一人で修行してるよ』

『そっか……』

ねえ、私も行ってもいいかな？」

『えっ？！』

会いたいと思っていた相手から、会いに行ってもいいかと言われて、ラディッツは内心、ドキドキしていた

『ダメ、かな？』

『い、いや！』

別にかまわないぞ！』

『よかった！』

じゃあ、すぐに行くから！』

セロリとの通信が終わり、ラディッツはまた修行を始めたが、全く身が入らなかった

こんな時に不謹慎だと、子供心に思ったが、それでもこの胸の高鳴りを止められなかった

修行を再開して10分程で、セロリは来た

急いで来てくれたのか、少し汗をかいていた

『ごめん、待った!?』

『い、いや』

ずっと修行してたから……』

『そっか、良かった』

ラディッツは修行を中断し、岩場に腰掛けた

セロリも、その隣に座った

『お母さん、大丈夫そう?』

『さあな……』

いつ起き上がるやら……』

『そう、だよね……』

セロリは、心底心配そうな表情をした

つくづく、珍しいサイヤ人だと、ラディッツは思った

まあ、こんな純情な少年の様な気持ちになるラディッツも、珍しいサイヤ人ではある



のだろうか

『お父さん、明日……』

……処刑、されるんだよね？』

『ああ……』

『もう、どうにもならないの？』

『……』

ラディッツは、どうにもならないだろうと思ったが、口に出せなかった

父のした事は、テロ行為以外の何でもない

父は、完全にテロリストなのだ

とても許されるとは思えない

ラディッツはそう思ったが、セロリを余計に心配させるし、自分もそれを認めたくないために、口に出せなかった

『やっぱり、サイヤ人を変える事は、出来ないのかな？』

『セロリ……』

『私、ラディッツのお父さんなら、きっとやれるって思ってたのに……』

ラディッツは、セロリの辛そうな表情を見ると、堪らない気持ちになった  
だから、こう口走った

『セロリ、親父はまだ負けてないぞ』

『えっ？』

でも、今は捕まって……』

『まだ生きてる』

昔、親父が言ってた

生きてるうちは、まだ負けじゃないって

それが、サイヤ人だって』

『ラディッツ……』

『だから、親父はまだ負けてない』

それに、親父は言い出したら曲げない男だ

やると言ったらやる』

『でも、どうするの？』

『俺が……』

ラディッツは一瞬、言葉を呑み込もうとした  
だが、己に喝を入れて、言葉をつづった

『俺が、親父を助け出す！』

『ええつ、ラディッツが!!?』

『ああ!』

セロリは、また心配そうな表情をした

ラディッツも一瞬だけ、言ってしまったと思っただが、それでもやるんだと、思い直した

『でも、どうやって?』

相手は、ラディッツのお父さんも捕まえちゃう様な人達だよ?』

『下手に考えるより、シンプルな方が、やりやすい

なに、何とかする』

『わ、私も手伝うっ！』

『なっ!??!?』

心配性のセロリからすれば、ラディッツ一人に危険な事をさせるのが嫌だったのだろ  
ろ

それがわかったから、ラディッツはセロリの申し出を断った

『いや、俺一人で十分だ』

セロリは何もしないでかまわない』

『で、でも……』

『大丈夫だ』

俺は、あのバーダックの息子なんだぞ？

これくらい、何でもないさ』

『ラディッツ……』

セロリは、この日一番の、不安気な表情をした  
しかし、意を決したような表情に変えて、言った

『わかった、ラディッツを信じるよ』

『お、おう！／＼／＼』

ありがとうよ！／＼／＼』

『うんっ！／＼／＼』

その後、少し話をして、セロリは帰って行った  
ラディッツは、もう少し修行してから帰ると言い、その場に残った

『（ああは言ったが、大丈夫かな？）』

ラディッツは、不安な気持ちで一杯だった

だが、やると言ったからには、やらねばならない

『（いや、何を怖がってるんだ俺は！

自分でも言っただろ!!？

俺は、あのバーダックの息子なんだぞ！

やれない事はない！』

ラディッツは、己に喝を入れ、不安な気持ちを振り払うように、修行した

そして、バーダック達革命軍の、公開処刑の日は来た

ラディッツは、この日、自分もテロリストの仲間入りだなど、少し自嘲気味に笑った

『（親父、今日、俺はあんたを超えてやる！）』

ラディッツは、まだ起き上がれないギネに朝食を用意した後、決意に満ちた顔で、処刑場所に向かった

処刑場所は、ベジータ王子の城の近くだった

囚われた革命軍の皆は、鎖で繋がれ、周りには見張りのサイヤ人が大勢いた

バーダックは、未だジャコ星人の糸にしばられ、今にも息絶えそうな、苦しげな表情をしていた

処刑は、まずバーダックから行われるらしい  
その後、残りの全員は一気に焼き払うらしい

いつものベジータなら、こんな事はせず、あの戦いの後、すぐにでも処刑するだろう  
だが、今回、公開処刑をするのは、自分に逆らう者はこうなると言う、見せしめだ  
いくらベジータでも、いちいちテロリストの相手をするのは面倒なので、出来れば今  
回で最後にしたかったのだ

『それではこれより、反逆者バーダックの、処刑を始める!!?』

ベジータの声に応えるように、ベジータ派のサイヤ人は声を上げた

バーダックの処刑方法は、身体の端から徐々に心臓に向かって、気功波で貫くと言う、  
残虐な方法だった

『ちつ、何も出来ねえで、終いかよ・・・』

バーダックは、いかにも悔しそうな顔をしていた

あれだけの大口をたたいてこのザマでは、あの世で仲間にあわず顔がない

ギネやラディッツ、そして、カカロットにも、何もしてやれなかった  
その事が、最大級の後悔として、バーダックに降りかかった

『無様だな、バーダック』

いくらフリーザを倒しても、ただ突っ込んで来るだけの貴様では、俺の相手にならな  
かったな』

『へっ、流石だぜ、王子様よお……』

まさか、その歳でここまで見事に王子をやれるとはなあ……

俺の完敗だ、好きにしろ……』

『では、望み通りにしてやる!!?』

『があああ!!?』

ベジータの指先から発せられた気功波が、バーダックの右脚を貫いた

そして左脚、両の太股、右腕、右肩、左腕、左肩と、順に貫き、遂に、横腹まで貫い  
た

『おつとすまん』



次は心臓を撃つつもりだったんだが、狙いが外れちゃった』  
『くっ……』

へっ、ノーコンがよお……

次は、外すなよ?』

『そうだな、しつかり狙わなくてはな……』

ベジータの指先が、バーダックの心臓に向いた

ラディッツは、ここまで必死に耐えた

すぐにも飛び出したいのを、血涙を流さんばかりに耐えた

だが、まだだ

まだ、動く時じゃない

もう少し、もう少し……

『では、これで終わりだ

今から、死んだ仲間の所へ送ってやる』

『へっ、そうかい……』

『死ねっ!!?』

ベジータの指先が、光り始めた  
その瞬間、ラディッツは動いた

『(今だっ!!?)』

## 第二次ベジータ紛争

バーダックが、今まさに、ベジータの手で処刑されようとしていたその頃、セロリは、あの場所でただ一人、父を助けるために戦うと言ったラディッツの無事を、願っていた

『ラディッツ……』

そして、ギネもまた……

目を覚ますと、誰もいない事に、とてつもない寂しさと、不安を覚え、涙を流していた

『うっ……』

ぐすっ……

バーダック……

ラディッツ……

カカロット……」

そして、バーダック達は……

『死ねっ!!?』

ベジータの指先が光り、バーダックにトドメを刺そうとした

その時

『(今だっ!!?)』

ベジータはもちろん、見張りの兵も全員、バーダックのいる処刑台を見ていた  
誰もラディッツのいる方を見ていない

ラディッツはそれを確信し、ベジータに向けて気功弾を放った

『くらえっ！』

ドローン！！？

『ぐっ、誰だ！？』

ベジータは、大してダメージを受けてはいなかった  
だが、それでいい

ラディッツはもともと、自分の技でベジータを殺せるとは思っていなかったのだ  
それに、いくらスカウターでも、今の攻撃をした相手までは特定出来ない  
ピンポイントでラディッツが狙われる事はないだろう

『誰だ、今俺を撃つたのは！？』

出て来やがれえ！！？』

王子は随分ご立腹だ

それはそうだろう

王子である自分が、不覚にも背中を撃たれたのだ

あのプライドが服を着て歩いているようなベジータには、かなりの屈辱だった

『出てこないなら、ここにいる全員を吹っ飛ばすぞ!!?』

『な、あんまりだろっ!!?』

『横暴だ!!?』

ベジータの一言で、場内に暴動が起こった

ラディッツの予想通りの結果となった

ベジータはプライドが異常に高い上に、まだ子どもだ

よく考えずに物を言う時もある

しかも、相手は獰猛なサイヤ人連中だ

そんな理不尽な事をされれば、反抗もする

ラディッツには、こうなるだろうと予想は出来ていた

ベジータは、バーダック達の処刑は後回しに、暴徒達の制裁に向かった

『しめた!』

今のうちに！』

ラディッツは、この隙にバーダックの元に向かい、周りのジャコ星人を瞬く間に殴り倒した

気功波で倒しても良かったが、それではベジータ達に気付かれる恐れがあった  
面倒だが、素手で倒すのが一番だった

『親父、大丈夫かつ!??』

『ラディッツ……』

へっ、まさか、こんなガキの考えるチャチな作戦に助けられるたーなあ……』  
『う、うるせえ！』

それより、逃げるぞ！』

ラディッツは、バーダックを担いで飛んだ

そして、少し離れた岩場にバーダックを寝かせた

『親父、ちよつとここで待ってるろ』

『お前、どこに……?』

『まだ、トーマ達が残ってる』

『……』

ラディッツは、一人前の男の顔をしていた  
バーダックは、それが堪らなく誇らしかった

『（へっ）』

このガキも、いつの間にかデカくなりやがったなあ……』

『親父?』

『行って来いラディッツ』

『……おう!』

ラディッツは、処刑場に向かって飛んで行つた  
バーダックは、そんな息子の背中を見送った

『流石、俺のガキだぜ……』

『……あの』



『っ!??!?』

その時、バーダックは背後から、声を掛けられた  
その人物とは……

処刑場では、ベジータ達と暴徒達が、戦闘を行っていた  
トーマ達は既に仲間に解放され、戦闘に参加していた  
ラディッツは処刑場に辿り着くと、トーマ達と合流した

『トーマっ!!?!?』

『おう、ラディッツ!』

バーダックはどうした?!?!?』

『近くで待たせてある!』

今は戦闘に集中しろっ!』

『へっ、言ってくれんじゃねーか!!?!?』

ラディッツも参加して、戦闘は更に激化した

しかし、戦況は、ベジータ達が圧倒的に優先だった

『ちっ、このままじゃジリ貧だぜ……』

ラディッツは、この戦況を打破する作戦までは考えていなかった

こうなるだろうとは予想はしていたが、その後の事を考える時間はなかったのだ  
ざつくり言えば、後はなるようになるという考えに辿り着くしかなかった

『ちっ、仕方ねえ……』

トーマ!!?

一旦退くぞ!!?』

『何っ!!?』

馬鹿言うな、ここで引き下がれるか!!?』

『このままやっても死ぬだけだ!』

今回は退いて、またら作戦を立てるんだ!』

『……今回は、お前に着いてやる

でも、次は勝つぞ!』

『上等だ！』

よし、みんなに伝えろ！』

ラディッツは戦鬪を継続しながら、トーマはセリパ達に退くと伝えた

そして、セリパ達も、他のサイヤ人達に退く様に伝えた

ラディッツが言うよりも、トーマやセリパ達に言われた方が、みんなは従うと思ったからだ

そして、ラディッツにはまだ、やる事があつた

『ベジータ!!?』

『ん?』

何だ貴様は?』

ラディッツは、ベジータの前に立ち、語りかけた

『今日は俺達の負けだ

だが、次はこうはいかんどぞ!』

『次？』

貴様、今日はここから帰れると、そう思っているのか？』

『ああ』

じゃねーと、お前のプライドが許さないからな』

『何？』

『どう言う意味だ？』

『相手はただの下級戦士の集まりだ』

しかも、今はバーダックも動けない』

そんな相手にコケにされたんだ』

なら、相手の罠にハマってやり、それでも完膚なきまでに痛め付けなきや、お前のプライドが許さないだろう？』

『……』

ラディッツは、ベジータを挑発した

これは賭けだった

もし、ベジータが自分の話にのらなければ、自分達は逃げられないのだから

『ふんっ』

ならば、貴様の策にハマってやろう』

『っ!!?』

・・・へっ、だと思っただぜ

次はこうはいかんど!!?』

『貴様らには何をしてしても無駄だと、次で教えてやる』

『はっ、上等だ』

『貴様、名前は何て言う?』

『バーダックの息子の、ラディッツだ』

『ラディッツか・・・』

貴様の顔と名前は覚えておこう』

『光荣だ』

『じゃあな!!?』

ラディッツは、ベジータの前から飛び去った

その後、ベジータは全兵に撤収すると伝え、反乱分子を見逃した

ベジータの部下の中には、数人不満を漏らす者もいたが、ベジータに恐怖し、全員ベジータに従った  
そして、城に帰っていった

## サイヤ人魂

『いや、悪いな、セロリ』

『別にいいよw』

でもラディッツ、こんなひどい怪我してる人をあんなところに置いて行っちゃダメだよ？

せつかく助けたのに、衰弱して死んじゃうところだったんだから』

『……すまん』

『わかればよし！』

ラディッツは、バーダックを助け出し、戦場に戻るため、バーダックを岩山に待たせた

そこにセロリが現れ、バーダックを手当てしてくれたのだ  
今は良く眠っている

『しかし、親父がこれじゃあ、次の戦いは厳しいな』

『どうするよ、ラディッツ？』

『トーマ……』

しかし、親父をこれ以上戦わせるのは……』

『だな……』

しかし、バーダック抜きじゃ、勝てねえだろ?』

『トーマ、あんたの口からそんな弱音は聞きたくないな』

『……すまん』

トーマの不安はもつともだが、ラディッツとしては、歴戦の猛者である彼の口からそんな台詞は聞きたくなかった

『ちよつと、出てくる』

『ああ……』

ラディッツはそう言うと、席を外した

そして、一人で、あの修行場に来た

いつの間にか、ラディッツにとつても、ここは特別な場所になっていた

トーマにはあんな事を言ったものの、ラディッツも不安なのだ



ここ来れば、そんな不安を忘れられると思ったのだ

『いつからだろうなあ、ここがこんなに落ち着くようになったのは……  
ちよつと前まで、地獄だったのによお……』

ラディッツが、一人物思いにふけっていると、誰かがいきなり、ラディッツの頭に手を置いた

ラディッツが振り返ると、そこにはバーダックが立っていた

『親父……』

『何してんだ、こんなところで』

『……ちよつと考え事してただけだ』

『そうか』

『動いて大丈夫なのか？』

『誰に言ってるんだ、バカタレが』

『こんくらい屁でもねえよ』

バーダックは、ラディッツの横に腰掛けた

そして、今まで聞いたことがない程、優しく話しかけた

『ラディッツ、ビビってるのか？』

ベジータ王子の事？』

『……悪いかよ』

俺だけじゃない、トーマも、他の奴らも、みんなビビってるよ』

『じゃあ、トングズラするか？』

『……出来るならそうしたいぜ』

でも、そう言う訳にもいかねえ

でもいい方法も浮かばねえ

俺は……』

『ラディッツ……』

バーダックは立ち上がり、ラディッツを見下ろすと、

『歯あ食い縛れえええ!!?』

『があっ!??!?』

．．．豪快に殴り飛ばした

『い、いきなり何しやがる、クソ親父!!?!?』

『へっ、どーだ、スツキリしたか?』

『あ?』

『お前、自分を誰だと思ってるんだ?』

フリーザに勝った男、バーダックのガキだろうが  
もつと胸張れ

下向いてんじやねえ!』

『親父．．．』

『わかったら上向け』

お前ならやれる

お前のサイヤ人魂、俺に見せて見ろ?』

『．．．』

ラディッツは、少し泣きそうになっていた

今まで恐怖でしかなかった父が、自分を励まし、激励してくれた  
それが嬉しくてたまらなかった

『それとも、ホントにトングズラすつか?』

『……へっ、馬鹿言え!』

俺はバーダックの息子だぜ?

敵から逃げたりしねえ!』

『へっ、言いやがる

……っ!?!』

『お、親父っ!?!』

バーダックは、その場に倒れた

もともと重傷だったのに、更に先程ラディッツに喝を入れた時に、傷口が開いたよう  
だ

『だ、大丈夫か!?!』

『へっ、たいした事ねえよ』

『その減らず口が叩けるなら、大丈夫みたいだな  
たく、世話がかかるぜ』

『うるせーよ』

ラディッツは、バーダックを抱えて、仲間の待つ根城まで飛んだ  
そこでは、皆まだ不安そうな表情をしていた  
それを見て、バーダックは声をあげた

『お前ら、いつまでもウジウジしてんじやねえよ!』

『『っ!』』

いきなりのバーダックの声に、皆彼を向き直った

ラディッツも、バーダックを支えながら、強気な表情で周りを見ていた

『仮にも宇宙一の強戦士族、サイヤ人だろうが!!?』

でさえ喧嘩が出来るって、喜ぶくらいの意気地い見せやがれ!!?』

『』  
『』

皆、バーダックの話聞いて、少しずつ表情を変えていった

それは、一つの開き直りである

自分達は、戦いに生き、戦いに死ぬ

そう言う種族だったはずだ

なら、何も不安を感じる必要などないはずだ

皆、自分にそう言い聞かせたのだ

『周りを見てみる

これだけの仲間がいんだ

何を怯える必要がある!!?

俺達は一人で戦う訳じゃねえ

これだけの仲間と総マンはるんだ!!?

もつと仲間を信じやがれ!!?』

『親父の言う通りだ!!?』

相手も強いが、俺達だって経験を積んだ戦士なんだ!!?

簡単にやられる訳がない!!?』

バーダックに続いて、ラディッツも叫んだ

皆、ラディッツが叫ぶのを見て、更に表情を変えた  
いつもの不敵な笑みをした、サイヤ人の顔になった

『それに、この前、親父は自分より戦闘力が劣る相手に負けた！

それは相手が頭を使ったからだ!!?』

つまり、数や戦闘力が劣っても、作戦さえ立てれば勝てる!!?』

それはこの前、ベジータ王子が証明してくれた!!?』

ラディッツの話聞いて、皆、納得の声をあげた

バーダックはそんなラディッツを、暖かい表情で見ている

『作戦は考える!!?』

でも、それはみんながないと出来ない!!?』

だから、俺に、俺達に力を貸してくれ!!?』





## 決着

バーダック達が処刑を免れた翌日、バーダック達は念密に作戦を練り、とうとう最終決戦に挑もうとしていた

『……出来る事はやった

後はやるだけだ！

用意はいいか、みんな!!?』

『おおおおお!!?!!?』

ラディッツの声に、全員が応えた

皆、とつくに不安な気持ちを忘れ、戦士の顔になっていた

バーダックは、未だ傷が癒えず、戦闘への参加は不可能だった

それが悔しくて仕方なかったが、息子と仲間を信じて、この戦いを任せた

『作戦は、さつき話した通りだ!!?』



『ナツパ!!?』

『あいよっ!!?』

ベジータの声で、ナツパが指を二本突き立てた

『っ!!?』

デカイのが来るぞ!!?

備えろ!!?』

ナツパの動きに気付いたラディッツは、仲間にも呼んで叫んだ

仲間はラディッツの声で、防御の姿勢に入った

それと同時に足元から大爆発が起こり、革命軍側の半数近くがのまれた

『怯むな!』

「この距離ではそこまで威力はないはずだ!』

ラディッツの言う通り、革命軍とベジータ軍との距離はそこまで離れていないなら、今のような技をフルパワーで使えば自軍もダメージを受ける  
そんな事は脳筋のナツパだつてわかつてはいるはず  
ラディッツはそれを一瞬で分析し、仲間に喝を飛ばした

『気合い入れろよお前ら!!?』

祭りは始まったばかりだぞ!!?』

トーマの言葉に革命軍の仲間は雄叫びで応え、進撃をした  
敵軍との距離を潰す

まずはそれに専念し、極力攻撃はしなかった

『今だ!!?』

やるぞ皆!!?』

ラディッツの合図で、全員が動いた  
とつた行動はいたって単純

それは2〜3人のチームで格闘戦を仕掛ける事だった

エリート戦士達は個々の力が強いため、あまりチームプレーをしない

そしてなにより、エリート戦士達は泥臭い格闘戦より、気功波で一気に蹴散らす戦い方が主だ

こう近づかれては気功波は射てないし、仲間のフォローに射つのも難しい

その結果、否が応でも泥臭い格闘戦をせざるを得ない

案の定、革命軍側の連携と個々の格闘戦のレベルにベジータ軍の兵士は苦戦を強いられた

『ちっ、こんなクズ共の下らん策にハマるとはっ……!』

ベジータは苛立ちを隠せなかった

まさかこんな作戦とも言えないような手にやられるとは、思いもしなかったのだろう

『(みたかよ王子様

これがドブネズミの戦い方だ!)』

ラディッツは一先ずは思い通りに事が運んだ事に安堵しながら、次の行動に出た

『ベジータ!!?』

『っ!!?』

ラディッツ、貴様あ!!?』

ラディッツはベジータに挑んだ

頭に血が上ったベジータは、仲間の事を考えずに、気功波を乱射した

ラディッツはそれを必死で避けた

革命軍の仲間達には、予めこうなる事を予想し、ラディッツがベジータに挑んだら、ベジータの行動にも注意するように言っておいた

ベジータの攻撃にベジータ軍の兵士達は被弾、或は怯み、革命軍の攻撃をモロに受ける事になった

革命軍側にも被弾する者は出たが、大ダメージを受ける程の攻撃ではなかったため、攻撃を止めなかった

『貴様の様な下級戦士のクズに、このベジータ様がやられるかあ!!?』

『へっ!!?』

お行儀の良い戦いしかなかったボンボン共に、泥臭い戦い方が出来るのかよ!!?』

『なにをおお!!?』

ベジータは完全に頭に血が上り、ラディッツに襲い掛かった

ラディッツはベジータの攻撃を上手くさばき、確実に当てられる瞬間だけ手を返した一撃で決めようなどと言う横着はせず、速く鋭い攻撃で確実に体力を奪う

地味だが相手の体力、精神、冷静さを奪うこの戦い方は、確実にベジータを追い込んだ

だが、ラディッツも紙一重だった

格闘戦を好むバーダックとの修行で格闘技術はエリートにも引けは取らないレベルになつてはいたが、やはり元々のパワーが違う

一瞬でも気を抜けば、こちらが大ダメージを受ける

そのプレッシャーが、ラディッツの精神を擦り減らせ、体力を奪った

『(これは、思ったよりもキツイぜ・・・)

でも、俺がやらなきや・・・!』

俺がやらなきや……！

俺がやらなきや！

誰がやるっ!!?」』

ラディッツは己に喝を入れた

今、彼の小さな身体には、仲間達の、両親の、セロリの運命がかかっているならば負けられない

負けるはずがない

背負ったものが男をデカく、強くする

かつてバーダックにそう言われた

なら、今の自分は誰にも負けない

ラディッツはそう自分に言い聞かせた

『ちっ、チヨロチヨロしやがって!!?』

これでもくらええええ!!?』

『っ!!?』



ベジータが距離を取り、ギャリック砲の姿勢に入った  
あんなものをまともにくらつてはひとたまりもない

だが、背後には仲間達がいる

避ければ仲間にあたつてしまう

ラディッツは意を決して、構えをとつた

『かけるしかないか!!?』

ラディッツは気を高め、両手に気を集めた

『くらえ、ギャリック砲!!?』

『ダブルサンデー!!?』

二人の必殺技が、激しくぶつかった

大小の爆発が起き、空は震え、大地が轟音を立てた  
だが、すぐに均衡は破れ、ベジータが優勢になった

『はーっはっはっはっ!!?』

所詮貴様のパワーなど、そんなものかあ!!?』

『くそっ、もう、だめか．．．!!?』

ギャリック砲がラディッツにせまり、ラディッツは覚悟を決めた  
しかし、

『っ!!?』

背後から四つの気功波が放たれ、ギャリック砲にぶつかつた

ラディッツが振り返ると、トーマ、セリパ、パンブーキン、トテツポの四人が、ラディッツの援護のため気功波を放っていた

『み、みんな．．．』

『氣い抜くなラディッツ!!?』

『男が情けない顔してんじやないよ！』

玉ついてんだろ!!?』

トーマとセリパの言葉に応えるように、ラディッツが再び男の顔になった

『ぐっ、貴様らあああ!!?』

『ベジータ!!?』

あんたは強い!!?

俺よりもずつとな!!?

だが勝つのは俺だ!!?

俺には、仲間がいるからな!!?』

ラディッツは更に気を高めた

いや、無意識に気が上った

そしてギャリック砲を押し戻し、ベジータを追い詰めた

『お、押され・・・!』

あ、ああ、うわあああああ!!?』

ギヤリツク砲は完全にかき消され、ラディッツ達の気功波がベジータに直撃した。流石のベジータも実力はエリートにも迫るラディッツ達の攻撃をモロに受けては、無事では済まなかった。

だが、まだ倒れない所は、流石は王子であり、サイヤ人だ。ラディッツはそんなベジータに敬意を抱き、最後の攻撃を仕掛けた。

『流石だ、ベジータ』

尊敬するぜ、お前のこと

だが、これで終いだあああああ!!?』

『っ!?』

ラディッツはベジータに猛スピードで迫り、

『歯あ食い縛れえええ!!?』

バギイ!!?』

『があっ!??!?』

殴り飛ばした

この一撃でベジータは気を失い、墜落して行った

ラディッツがベジータに向かって猛スピードで飛び、何とか地面に叩きつけられる事は避けた

ラディッツはベジータを地面に寝かせ、大声で叫んだ

『王子は討ち取ったぞおお!!?!?』

その声を聞いた革命軍の兵士達は雄叫びをあげて残存戦力の殲滅にあたり、対するベジータ軍の兵士達は動揺を隠せずに倒される者、投降する者、奮闘するも、数に圧倒される者、など、急激に追い込まれ、鎮火は早かった

それほどベジータの存在がベジータ軍の戦力を支えていたのだろう

そう思うとラディッツは、やはりベジータは凄い奴だと心から思った

そして戦いは終わり、革命軍は勝利した

## 疑問

ラディッツ達は、ベジータに勝利した  
その報告はすぐにバーダックに届いた

『なあ、ギネ』

『なに、バーダック？』

『ラディッツは、デカくなったな』

『そうだねえ』

バーダックは不思議な気持ちになっていた

これが、親が子の成長を喜び、そして少し寂しくなる気持ちである事は、今のバーダックは知らない

だが、悪い気はしなないと思っていた

『流石、バーダックの息子だね』

『いや、俺達の息子だ』

ギネの言葉に、バーダックは微笑を浮かべて返した

その頃、ラディッツ達は

『被害状況を報告しろ』

怪我人はさっさとメデイカルマシンに打ち込め』

『トーマ、あんたは大丈夫なのかい？』

あのナツパと殺りあつたんだ

結構来てんじゃないかい？』

トーマは全軍に指示を出し、トテツポ、パンブーキン、怪我人の運搬に行っていた

『セリパか』

いや、大丈夫だ

ラディッツがあれだけやったんだ

これくらいで参ってちゃあ、年長者の面子丸潰れだぜ』

『そうかい

じゃあ、無理すんじゃないよ』

セリパがトーマに背を向け、飛び立とうとした時、

『セリパ』

『あ、何だ……』

ギユツ

『つ？／＼／＼』

セリパは、不意にトーマに抱きしめられた



『な、何すんだいトーマ！／／／／』

は、離しな！／／／／』

『．．．．』

トーマは無言でセリパを抱きしめていた

諦めた、という風に、セリパも抵抗するのを止めた

『．．．．どうしたんだい、トーマ？』

『．．．．お前が生きてて、良かった

そう思っただけだ』

『は、はあっ!?／／／』

ど、どうしたんだいトーマ!?／／／』

バーダックに感化されちまったのかい!?／／／』

『．．．．そうかもなあ』

セリパはそんなトーマに微笑み、背中に腕を回した

『あんたも、無事で良かったよ』

『……おう』

『ラディッツー!!?』

『ああ、セロリか』

所変わってラディッツは、ベジータをメデイカルマシンに運んだ帰りだった  
あれだけの攻撃でも、彼はそれ程の重傷は負ってはいなかった  
全くもってやはり彼は凄い奴だと、ラディッツは思った

『どうしたのラディッツ?』

『何か元気ないね?』

『ああ、ちよつと疲れちまつただけだ』

『そつか』

まあ、無理ないよ

戦争したんだから』

ラディッツはそこに引つかかっていた

なぜ父はあえて戦争をしたのか

サイヤ人を無差別に殺すだけの野蛮な種族から、誰かを守る存在にしたいなら、なぜ戦争をしたのか

これでは戦いを肯定しているのではないのか？

確かに極力死人は出さなかった

そして、極力殺さなかった

でも結局やったのはいつもと同じ（規模は違うが）、『戦い』だ

だが、そこから先どうするのか

ラディッツにはわからなかった

『ラディッツ？』

ラディッツが黙り込んでしまったので、セロリは心配になりラディッツの顔を（結構な近さで）覗き込んだ

『うわあつ!!?／／／』

『きやあつ!!?』

ラディッツの大声に、セロリは尻餅をついてしまった  
慌てたラディッツは、詫びれながらセロリに手を差し伸べた

『ご、ごめんセロリ／／／』

『もお、急に大声出さないでよ』

『お、お前があんな近くに顔持つてくるからだ!!?／／／』  
『だってラディッツが急に黙っちゃうんだもん』

心配しちゃうじゃない』

ラディッツはセロリの言葉に少しドキツとしてしまったが、それを隠しながら歩くス

ピードを上げた

『ごめん、今日は疲れたから、もう帰るよ』

『そう』

気を付けてね

またね、ラディッツ』

ラディッツはセロリに手を振り、自宅に飛んだ

『お袋、きつと泣きながら抱きついてくるんだらうなあ

まったく、子どもも楽じゃないな』

そんな事を考えたラディッツの顔は、年相応の子どもの笑顔だった

『(親父、親父の考えは分からないけど、俺、頑張ったよ

少しくらい、褒めてくれよな)』

## 家族の温もり

戦いを終え、ラディッツはバーダックとギネの待つ我が家に帰って来た  
それはラディッツにとって何でもない事

の、はずだった

だが今のラディッツは、生きて家に帰れる、帰れる場所がある、お帰りと言ってくれ  
る人がいる

そんな当たり前の事が、本当はとても幸せな事である

ラディッツは幼いながらも、そんな大人ですらなかなか気付けないことに気付いた  
もう生きて帰れないかもしれない

だが父のため、母のため、仲間のため、そして自分を信じて待つていてくれる少女の  
ため

ラディッツは覚悟を決めて戦地に出た

だが、その覚悟と同じだけ、それ以上の不安もあつた

宇宙一の強戦士族の一人とは言え、ラディッツはまだ5歳の子どものものだ  
逃げ出したかったし、泣きたかったし、弱音を吐きそうにもなった

それは決してラディッツが臆病な訳ではない

大人でもそうなるだろう

現に仲間達は戦いの前に意気消沈し、自分達は死ぬものと思っていた  
さ

それでも、ラディッツは立ち上がり、皆を引つ張った

我々では想像もつかないプレツシャーに耐えながら

(お袋、絶対泣き付いてくるんだらうなあ)

はあ、と大きなため息をついたが、その顔はどこか嬉しそうだった

『ラディッツうううう!!?』

『ぎやあああああ!!?』

案の定、帰った途端ギネが泣きながら抱きついてきた  
凄いで

『折れる~~~~!!?』

ラディッツの背中からボキボキッと音があった

『おいギネ、ラディッツが死んだぞ』

『?』

何言つて……

きやああああラディッツ!!?

酷い、誰がこんな!!?』

『お前だお前』



ラディッツは年の割に戦闘力は高かった

それは修行もあるが、戦いから帰ってくると毎回こうして母に重傷を負わされるから  
だった……

ラディッツが死の淵から復活し、また戦闘力が上がると、ラディッツは父に自らの疑問を打ち明けた

『なあ親父』

『あ?』

『これで良かったのか?』

『何がだ?』

『結局、俺達がやった事は戦争だ』

規模や目的は違っても、やった事はいつもと変わらない

サイヤ人を変えるにしても、本当にこんなやり方で良かったのか?』

『……』

『ラディッツ……』

バーダック、どうなの？』

バーダックはラディッツの疑問はもつともだと思つた

そしてラディッツには理由を知る権利がある

バーダックは二人から目を逸らしながらも、ちゃんと答えた

『まあ、お前の言いたい事もわかる

でも、これで良かったんじゃないか？』

『何でだよ？』

『俺達はサイヤ人だからだ』

『？』

ラディッツには、バーダックの言葉の意味がわからなかった

ギネも少し曖昧な顔をしている

バーダックはそれを見て、更に語った

『確かによお、ドンパチなんざしなくても済む方法があったかもしれないねえよな』

『じゃあ、何でそうしなかつたんだ？』

『知らねえからだ、その方法とやらを』

俺も、他の連中も』

『っ』

『俺達サイヤ人は、大した文明も知恵もねえ』

戦いか

地上げの商売以外で異星人との接触がなかったんだ

それは仕方ねえ

俺は修行がてら色々な星行ってきたから戦い以外のやり方も見たが、俺一人が知っているだけじゃ意味ねえだろ？

それにあのベジータ王子が戦い以外のやり方を素直にやるとも思えんしな』

『それはそうだが』

『それにサイヤ人のあり方変えようってバカでかい話なんだ

最後に俺達サイヤ人らしい方法で決めてもバチは当たんねえだろ

その方があいつらも納得するだろうしな

他のやり方は後でじっくり覚えりゃいい』

『じゃあ、この先はどうするんだ？』

戦いに勝って、親父は次は何をするんだ？』

『それはなあ……』

『……』

ラディッツとギネは、バーダックの返事を待った

だがバーダックから返ってきたのは、二人の予想外の言葉だった

『俺が、惑星ベジータの王になる』

『……は？』